KK FACTORY

雲八幡

高柳 寛

雲八幡

高柳寛

雲八幡

僕の名前は岸辺露伴、漫画家である。

ことの始まりは祖母の遺品整理から始まる。

生前、知り合いの多かった祖母は、地方の珍しいものを集める機会が多く、またそのコレクションもアパートと化した旅館から少し離れた蔵を埋め尽くすには容易というほどの量を所持していた。

先にも言ったように、僕の職業は漫画家である。つまり、面白いネタを探すのにはうってつけであるその蔵に何か珍しいものは無いかと、遺品の整理という名目で入ったのだった。祖母の管理はしっかりしていたようで意外にも埃っぽくもなく、収納も整っている状態であった。奇抜な模様が塗られている招き猫や、何の価値のなさそうな青い瓶、ムカデのように足が生えている造形物など、さまざまなよくわからないものたちが鎮座していた。その中でも僕はなんとなく、古ぼけた長方形の木の箱を手に取ってみる。箱には古い書体で『河伯の腕』と書かれ

ているようだった。僕はどうにもその箱が気になって仕方が無かったので、その箱の蓋をゆっくりと開けてみた。その中にはほっそりとした、古い木片のような物が入っていた。しかし、木というには何かがおかしいのは明らかであった。これは。腕か。箱に書かれていた文字を思い出す。そしてそれは頭の中で一致した。そう、これは腕だ。切り落とされたか、または何かの事故で失われ、数十年、数百年と残り続けた、言ってしまえばミイラの腕であった。なぜ、こんなものがこの祖母の蔵にあるのか。僕はまずその箱を持ち出し、河伯というものについて調べてみることにしたのである。

＊

河伯とは単純に河童のことらしい。

また別の意味として河の神である、ということは辞書を見てわかったことだ。しかしこれは文献としてのものであって、実態はない。その実態が今、目の前の机の上にあるのだ。

僕はインターネットを利用し、もう少し詳しく調べてみることにした。数十分

後にわかったことは三つ。河伯は中国神話での呼称であり、日本では河童の意味を持つということ。これは最初の辞書でわかっていたことだが。そして、河童の言い伝えは九州地方を中心に広がっている。そして現在の今もなお、一部の地域よっては河童の呪いというものが存在しているという池があるというのだ。しかし、その呪いについての記事はなく、ただ失踪した人間がこの呪いと無理やりこじつけられているかのように見えた。いわゆるオカルトである。

真実性が欠ける部分がとても胡散臭いし、こういったものは書き手の信仰感や価値観によって左右されやすい情報だ。インターネットはこんなものだろう、と僕はため息をついてパソコンの電源を落とした。

「九州か、あまり行く機会もないし、行ってみるか、なんだかんだ言って、呪いなんていうのも気になるし」

決断から行動までは早急だった。蔵で見つけた腕の箱を鞄に詰め、荷物をまとめて、ある程度の現金を持ち、その日のうちの飛行機を取った。そして、僕は九州地方でも河童の呪いというものが未だにあるというＦ県へ向かった。着いたときにはもう夕暮れでまずはホテルを探すことにする。空港前の見覚えのある広告の大きな看板たちを横目に僕はホテルを探して歩いた。

なんの変哲もないビジネスホテルを見つけ、その日予約していなくても泊まれるかどうかを確認する。
「予約はしてないんですが、泊まれますか？」
「はい、本日は部屋が空いているので大丈夫ですよ」
「そうですか、それじゃあ一泊。あ、朝食はいらないです」
「かしこまりました」
なんともない普通の会話である。僕はちょうどいいと思い、そのホテルマンにひとつばかりたずねてみることにした。
「この地域じゃあないんですが、この一帯で河童の呪い、なんて聞いたことありますか？　噂では何人かの人間が失踪しているとかで……。いや、変な質問をしているとはわかっているんですけどね」
少し怪訝な顔をしたホテルマンは、少しため息交じりで笑顔を作った。営業スマイルのようにも見える。
「何度か、そういった噂は耳にしたことはあります。ですが、それが河童の呪いだ、と言うのはそうは聞きません。言い方は悪いですが、確かに治安が悪い地域に限っては、急な失踪などは少なくはありません。ですが、それが河童の仕業だ

と思う人はさらに少ないかと思われます」
　このホテルマンが言うことを信じるとすると、治安の問題もあるが、それは決して河童の呪いなどではなく、人の手によって行われているものだという。それはそれである意味怖いが、僕が知りたいのはそこではない。論点がずれ始めている。
「それじゃあ、もうひとつ、ちょっと聞いていいですか？」
「なんでしょうか」
「そういった噂があったという発祥の地がどこか、わかりますか」
　そう尋ねるとホテルマンはＦ県の地図ではなく隣接の県の地図を出した。
「ここの県のＮ市という街に河童池という池があります、そこの近隣の方に聞けば恐らくですが、もっと詳しい話が聞けるかと思います」
　河童池か。噂どおりのそのままのネーミングだが、ここまで来たら行ってみることにしよう。
「ありがとう」
　そうホテルマンに言い、預かった鍵を持ち、部屋に入った。荷物を置き、夕食を食べるために街に出る。らーめんで適当に腹を膨らませ、再び部屋に戻る。

明日行くための道のりを確認し、その日は何事もなく眠りについた。
翌朝、目が覚め、着替えを済ますと同時に荷物を持って、チェックアウトを済ます。ここまで来てケチケチするのも主義ではないので、タクシーを呼びとめ僕は行き先を告げた。
「観光ですか」
人の良さそうな運転手はそう尋ねた。
「いや、取材で。観光なら河童の池なんか見に行かないですよ」
「そうですよね、へっへっへっ」
運転手は笑い終えるとしばらく黙り、交差点の信号で止まると再び口を開いた。
「私、その県の住民なんですがね、その池、実はとっくの昔に干からびてしまっているんですよ」
「そう、なんですか」
淡々という運転手に思わず僕は驚いた。まぁしかし。僕の目的は河童の存在の有無ではない。その河童の持つ呪いについて調べに来たのだ。
「それでも大丈夫かい？」
「いろいろ教えてもらってありがとう。でもかまわないので、そこまでお願いし

ます」
「わかりました」
運転手に道を任せ、料金が五桁になるかならないかのところで車が止まる。
「はい、到着です」
時間にして、二時間ほどか、外の景色をぼうっと眺めていたらあっという間であった。
「この先をちょっと歩いていけば池があったところがあるから、詳しい歴史とかを聞きたかったら、そこの近くの寺の住職さんに聞くといろいろ聞けるかもしれんよ」
「ありがとう」
僕は礼を言って、料金を払い、車から出ようとすると、運転手は「ちょっと待って」と声をかける。
僕が振り向くと彼は一枚の名刺を差し出していた。
「ここいらは宿もないし、なかなか連絡を取るのも難しいと思うからな。なにかあったらここに電話してください。お迎えにあがるので」
人の良さそうな運転手は本当に人の良い運転手であった。

そして、僕はタクシーを降りた。
言われた通りの道を歩いていくと、河童池と書かれた古ぼけた案内の看板が出ている。その看板は苔が生えていて、しばらく人の手に触れていないような。よく幽霊屋敷などで使われている案内図のようで雰囲気を出していた。
そして、僕は民家のない山道をひたすら歩き始めた。いくら歩いても、辺りは木だらけで景色を楽しむなんてものではなかった。だんだんと道も傾斜がきつくなってきた頃、ようやく、その河童池と呼ばれる場所へとたどりついた。
運転手の言っていた通り、その池は既に干からびていて、ただのくぼみと化していた。
「ここに呪いなんてものが存在したかも疑いたくなるなぁ」
僕はとりあえず、その池の跡地に足を下ろし、その上を歩いてみた。ここに池があったとも思わせないくらい、干からびて数年経過しているようだった。。
「寺があると言っていたな、あの運転手。ここに何もない以上、その寺を探してみるしかないようだな」
そう、僕が池から出ようとしたとき、池の山の斜面側に小さなトンネルのような空洞があるのが見えた。しかもその重々しい入り口にはなんとも似つかわしく

ないコーンが立っていて、ポールには立ち入り禁止と書かれていて、人が中に入るのを拒んでいるようであった。
僕は何か違和感を察知し、その空洞の入り口に近づいてみた。その中は暗く、奥の方は何があるのかまったく見えない。子供が入らないように立ち入り禁止にしているのだろう。僕は興味本位でそのポールを越え、空洞の入り口に足を伸ばした。
少し空洞に入ろうとすると同時に異変に気付いた。異臭が鼻につく。なんだこの臭いは。嫌な臭いだ。もしかしたら、これは人間の。人間の放つ一番嫌な臭い。僕はすぐに咽て、再びポールを越えて外に出た。
「なんだこの腐った臭い。死臭？　こんな空洞で……」
温泉で有名なこの地だが、硫黄のような臭いではない。まさに人間の腐っている臭いだった。
「くそ、マスクを持ってくるべきだったかな、しかし、とりあえずは奥を見てみるか……、何よりもその原因が気になる」
僕は再びポールを越え、袖を鼻につけ、携帯のライトで空洞内を照らした。臭いのわりには何も無い普通の空洞である。

「なにも、ないな……」
一歩一歩足を進めていく。臭いはなんとかカバーしているが、嫌な生暖かい空気が吐き気を催す。当然だが、人気は無い、死体の痕跡もまったく無い。奥に進むにつれて生暖かい空気が湿度を増していく。額に少し水滴ができ始める。感じで言うと嫌な感じだ。本能が今すぐここから出るべきだと告げているようにも思える。
ここは一度引き返して、寺に向かうべきだろうか。汗がだんだんと玉を作り、頬を伝っていくのがわかる。鼻を押さえている袖を動かして汗を拭う。それでも額は汗を噴き出し、次第には顎から水滴となって地面に落ちた。
「だめだ、なにもないな。やはり寺を探すしかないか……」
そうして、入り口のほうへ体を向けると同時に僕の右腕が『何か』によって掴まれた。その『何か』の握力は強く、右腕の骨が折れるかと思うほどで逃れようにも逃れられず、僕はその力に身を任せて、再び洞窟の奥の方を向く。何もいない、そして掴まれた感触も最早なくなっていた。が、洋服とその下の腕には『何か』に思い切り掴まれたあとがくっきりと残っている。僕はつい、焦って思い切り空洞内の空気を吸ってしまう。たちまちひどくなる吐き気。朝食を後回しにし

ておいて正解だった。
しかし、この現象は尋常ではない。
もう一度、立ち上がり、出口に向かおうとすると再び、『何か』が僕の右腕を掴み、尻餅をつかせた。
どうやら僕がこの洞窟から出ることを許されなくなってしまったようだ。
試しに外のほうへ顔を向けてみると、今度は右手で思いっきり顔面を殴られ、僕はその場でしゃがみこんでしまう。なぜ右手だとわかったかと言うと、その右手は僕の右手であり、僕は今、無意識の中で自分自身を殴ったのだった。口の中に血の味がにじむ。やはりおかしい。ここは異常だ。
「ヘブンズ・ドアー！」
人間というものを本にし、文字で記憶を閲覧、または書き込みをすることで操ることができる能力を僕は持っている。そこに書かれている文字を読むことにより、今自分に何が起きたかわかるかもしれない。さっそく、さっき僕の過去に何が起きたのかを確認する。しかし、そこにはそれ、つまり何者かに掴まれたり、自分で自分の顔を殴ったなどに関することは一切何も書いていなかった。つまり僕の体は通常通り、動いている。掴まれた行動と殴った行動は僕以外のなんらか

の意思によって動かされたものだということがわかった。
「ま、まずいな……、このままだと僕も、この悪臭の仲間になってしまう！」
僕は空洞の壁にもたれかかった。なるべく出口を見ないようにして。そしてここから出る方法を考える。
「無理に体を外に出そうとするとあの握力じゃあ……、考えたくは無いが僕の右腕を千切られる可能性がある……。シンプルに背を向けて外に出ようとすると……」
僕は出口に背を向けて、座ったままずりずりとお尻を進める。するとまさに出口とする背後から、ずるり、ずるりと何かが歩いて近づいてくるような音がする。背筋が寒い。反射的に思わず振り返る。同時に右腕に激しい激痛。僕の体はその右腕にもてあそばれるようにまた空洞の奥のほうへと体を転がしてしまう。
「ハァ……ハァ……、お、おええっ」
むせて吸い込んだ空気で思わず嘔吐する。あと数分でもこんなところにいたら気が狂ってしまう。僕は鞄を漁る。その中にあった、河伯の腕が入った箱をおもむろに取り出した。最初見たときはわからなかったが、改めて見るとこのミイラの腕は、右腕だ。

もしかして原因はこいつなのか、とその箱を開けた瞬間に中に入っていた河伯の腕が僕の腹部に突き刺さる。

「なっ！」

必死に抜こうとするも、その腕はビクともしない。メリメリと僕の体に入ってくる。

「へ……ヘブンズ・ドアーッ！」

今度は能力で自分ではなく、その河伯の腕に対し、幽波紋を叩き込み、本にして中を見てみるが、やはり書かれていたのは『死』という文字だけで、この腕は間違いなく死んでいることがわかった。その死んでいる腕がなんらかの形を持って、僕に攻撃をしているのだ。僕は痛みの中、顔を右に向けて、出口を再び見る。どうにかしてこの状況を脱さねば。

この現状でその『小さな変化』に気付いたのは僕だったからこそなのかもしれない。別の言い方をすれば僕はそれに賭けるしかここから助かる方法がなかった。自分の能力で自分の体のページに『出口の方へ百メートル吹っ飛ぶ』そう書き込み、その文字の通り僕の体は出口のある右方向へ吹っ飛んだ。僕の体にめり込んでいた腕は傷を広げた後に、地面へ落ちたようで、外へ出た僕の体からは、その

腕は消えていた。少しばかり出血がある。臭いのせいもあってか意識が少しばかり遠退いて行く。ここが立ち入り禁止の理由もわかった。そして、ここからこの嫌な臭いがする理由もなんとなくわかった。この空洞内には河童の呪いが存在したのだ。何も知らない人間はこの空洞に足を踏み入れ、そして二度と外へ出ることはなく、最悪の結末を迎えるのだろう。今回、僕は蔵で見つけたあの腕が無ければ、恐らく僕はその犠牲者たちと同じようにこの空洞の中で死に至るところであっただろう。

「そこで、なにをしている」

背後から男の声がした。振り返ると住職らしい格好をした男が立っていた。

「……」

僕が覚えている記憶はここまでであり、次に目を覚ましたのは先ほどの住職の寺の住居にて医者に体を診てもらっている最中であった。

「気付きましたか、大丈夫、傷は深くないみたいですから」

そう言うと、医者は立ち上がり、住職と何か話しをして出て行った。

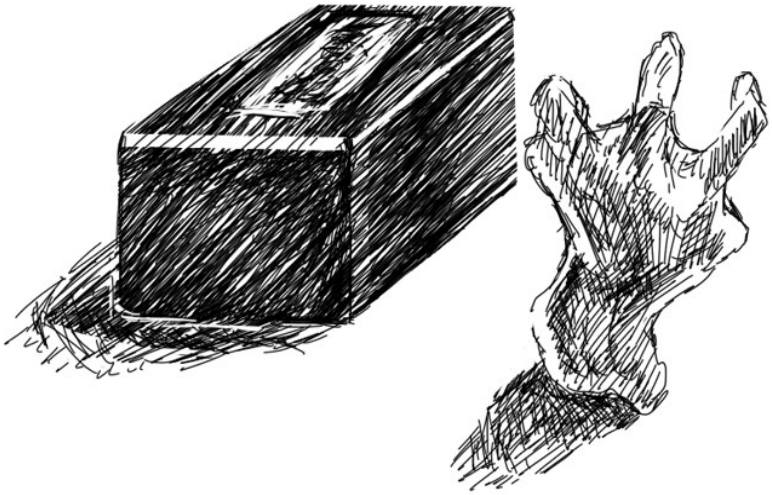
「大丈夫ですか」

「う……、なんとか」

僕は体を起こし、傷口を触る。あれほど切り付けられた痛みがあった傷口は何かが押し付けられたような痕としか残っていなかった。
「あなたは……、無事だったということはあなたが『腕』を持っていたのですね」
僕ははっとする。
「腕について、知っているんですか」
「ええ、あの腕は、もともと、この寺に納めてあったものなのです。それがどういうわけか、世間を渡り、この数百年、行方知らずになっていたものなのです」
「あの空洞は、その腕と何か関係があった、ということですか」
「あの腕はもともと、あの空洞の中で住む河童のものだったという言い伝えが残っております。昔はあの池にも水があり、誰もその空洞の存在に気付くことはなかったのですが、数年前に干からびてしまい、あの空洞が姿を現してしまったのです。そして大昔の書物によると、あの空洞の奥にはさらに深い池が在るといわれています。そこに河童は住んでいたと言われていたのですが、陸に上がっていたところを、武士によって腕を切り落とされた河童がいたということだけが史実で残っています。私の先祖はその河童の強い怨念を抑えようと何代にも渡り、そ

の腕を持つものを待っていたのです」
やはり、腕を出した瞬間に『僕の腕が自由になった』という変化は当たりだったようだ。
「つまり、もうあの空洞では二度とこういった事例は起きなくなるということですか？」
「それは……」
住職はその後、言葉をにごらせ、わからないと首を振った。

祖母が持っていた河伯の腕のおかげで命だけは助かったが、河童の呪いとやらは本当に存在し、この身を持って、その呪いを実体験した。
その後、その空洞は、腕が『納められた』ということもあり、入り口はコンクリートで塞がれ、この世から存在を消された。その事実を知ったのは、僕がその数年後にその場を訪れたときだった。

発行日・２０１３年５月２０日
発行者・高柳寛（ KK FACTORY ）
印刷所・株式会社ポプルス
表紙イラスト・高柳寛
ＨＰ・ http://kkfactory.doorblog.jp/
ご意見ご感想はこちらまで・ kurzstories@hotmail.co.jp

桧瀧社 KK FACTORY